

(2) 発掘調査の実施

にしまきの

西牧野遺跡

所在地 岡崎市榎山町・牧平町地内
(北緯 34 度 54 分 50 秒
東経 137 度 17 分 5 秒)

調査理由 第二東海自動車道横浜名古屋線

調査期間 平成 22 年 6 月～平成 23 年 3 月

調査面積 24,810 m²

担当者 宇佐見守・石原真吾・伊奈和彦・
成瀬友弘・亀甲真史・榊原清人・
白井克尚・本田英貴



調査地点 (1/2.5 万「御油」)

調査の経過 第二東海自動車道横浜名古屋線の建設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社より委託を受け実施した。西牧野遺跡の調査は、前年度の(財)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターに続き 2 年目の調査となる。

立地と環境 西牧野遺跡は岡崎市東部の榎山町・牧平町に所在する。両町は南北約 1 km、東西約 4 km の盆地状地形を形成しているが、本遺跡はそのほぼ中央を西流する男川左岸の河岸段丘下位面に立地する。標高は約 70～80mをはかる。周辺の遺跡としては、平成 5 年に額田町教育委員会により調査された牧平遺跡(縄文後期～弥生前期・中世～近世)が知られている。

調査の概要 本年度の調査地点は、愛知県埋蔵文化財センターが実施した 09A 区と 09C 区にはさまれた部分で、調査面積は 24,810 m²をはかる。調査は東から 10A 区～10I 区の 9 調査区に分割し実施した。調査の結果、古墳時代～古代を除く、旧石器時代～近世の遺構・遺物を検出したが、主要な時期は旧石器時代と中世である。(宇佐見守)

10A 区 10A 区は、前年度愛知県埋蔵文化財センターが調査を行った 09A 区の西隣に位置し、遺跡南側にある段丘の末端付近にあたる。調査区内を縦横に交差する自然流路が複数検出されたが、全体的に遺構は希薄と言える。調査区南東から北西にかけて延びる溝状遺構の黒色土層中からは、縄文土器片が数点出土している。また、調査区北西の土坑から、縄文晩期から弥生初頭のものと思われる土器片が出土している。この土器の底部には穿孔が施されている。(亀甲真史)



10A 区 調査区全景



10A 区 底部穿孔土器出土状況

10B 区 10B 区は 10A 区側からの傾斜地に位置しており、圃場整備により斜面堆積が水平に造成されている状況である。黒色土面で検出した石囲遺構から、山茶碗が出土している。中世墓に関連する遺構だと考えられる。調査区中央では、東西方向に中世と考えられる 2 条の溝があり、山茶碗片が出土したほか、南北方向の溝では、黒色の埋土の中から支柱石や山茶碗や少数の縄文土器が出土している。その溝の東側では中世の掘立柱建物が 2 棟確認された。建て替えによるものと思われる。調査区西側では、大量の中～大礫を含んだ溝を含め、東西方向の溝が数条あり、10C 区側へと続いている。また南側の標準トレンチ内掘削時にトレンチ内から、また下層確認調査時には径 5 m の範囲から凝灰岩（一部はチャート）の剥片石器が 30 点まとまって出土した。

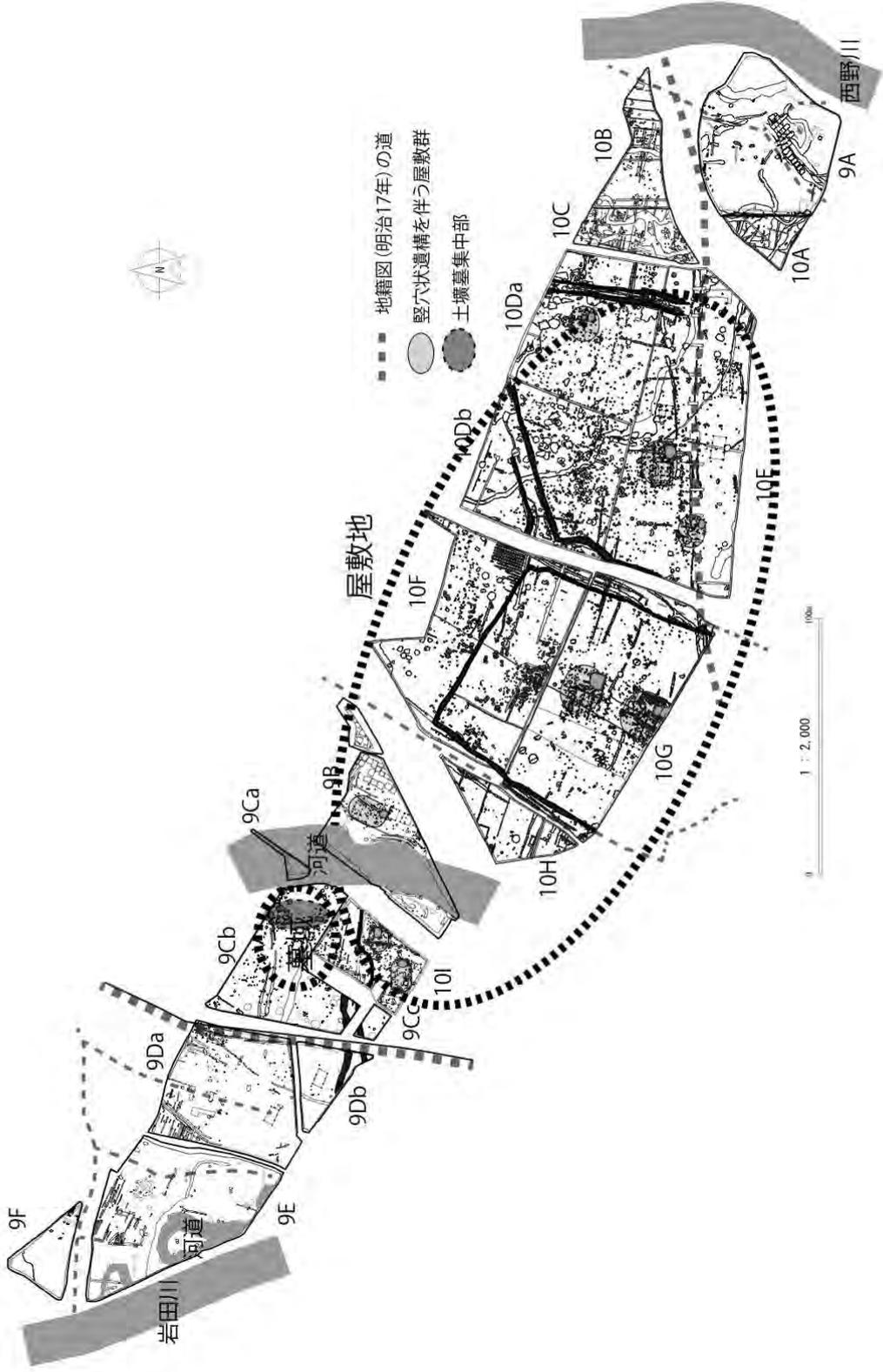
(榊原清人)



10B 区 中世の石囲遺構



10B 区 剥片石器出土状況



- 地籍図(明治17年)の道
- 竪穴状遺構を伴う屋敷群
- 土塚墓集中部

0 100m
1 : 2,000



屋敷地

岩田川

西野川

9F

9Da

9Cb

9Ca

9B

河道

10F

10Db

10Da

10C

10B

10A

9A

10G

10H

10E

9Db

9Cc

10I

9E

河道

10C区 10C区の調査成果としては、縄文時代晩期～弥生時代中期の遺物を含む大規模な流路が確認されたことがある。流路は、10A・10B・10C区にかけて南北の方向に川の跡（土石流）として蛇行する形で確認されたもので、流路の中からは、縄文土器や弥生土器も確認された。縄文土器や弥生土器は、川の流れによって近くから運び込まれたものであり、流路がおそらく弥生時代以降に埋まったものとして考えられる。また、調査区では、中世の遺構や遺物も見つかっている。石組みのカマドと思われる遺構も確認された。10C区の遺物については、流路下層から縄文時代晩期の浅鉢がつぶれた形で出土した。流路上層からは、弥生時代中期の古井式土器片が出土している。中世の遺物としては、土師質鍋片、山茶碗片、魚波文付の古瀬戸瓶子片、陶丸などが出土した。また、用途不明の銅製品や、黒曜石剥片も出土している。

（白井克尚）



10C区 古瀬戸（魚波文）出土状況



10C区 縄文土器出土状況（北西より）

10Da区 10C区の西隣に位置する10Da区は、主に東半分で遺構のまとまりが見られる。縄文期の遺構としては、調査区中央やや南で石囲いの炉をともなう竪穴建物を検出した。出土した数点の無紋の土器片や住居形態などから、縄文中期の遺構と考えられる。掘り窪められた床面は、直径約3.9mを測る円形で、柱穴は建物の内側に複数配置され、五角形ないし六角形を呈している。石囲いの炉は、土・石ともに被熱痕が見られ、建物の中央ではなく北端に位置している。石組みは五角形か六角形を意識して組まれている可能性もある。この他に、調査区東端で炉をともなう4本柱の竪穴建物を検出した。柱間は約2mを測り、炉の囲いは見られなかった。弥生期の遺構としては、調査区南東部で20

棟程が切りあっている建物群を検出した。小さなものは一辺約 1.5m、大きなものは一辺約 5 mを測り、方形がほとんどである。後の時代に削平されているようで、かすかな痕跡にとどまる。柱穴の 1つから貝田町式細頸壺が出土している。なお、ところどころ焼土らしき痕跡が見られる。時期は不明であり、科学的な分析などの精査が必要である。中世の遺構としては、調査区中央で床面が皿状に掘り込まれた竪穴状遺構 2基を検出した。2基とも複数の柱穴が見られ、形状や出土遺物などから馬小屋と推測できる。1基は東西約 1.95m、南北約 2.1mの隅丸方形で、南西角に盛土がされ、スロープとなっている。他方は前者よりもやや大きく、東西約 2.85m、南北約 2.55mの隅丸方形で、北東角にスロープがあり、床面からは山茶碗や土師質鍋などの遺物が出土している。これらの馬小屋と思われる遺構の周辺はピットが集中しており、何棟かの掘立柱建物が建つ。馬小屋は、これらの掘立柱建物に付随した施設かとも考えられる。掘立柱建物はこの他に、調査区南東角の一段高くなった部分に 1棟（2間×3間）、調査区中央南側に 2棟（1間×3間が 2棟）、北東部に 1棟（2間×2間）が確認できる。調査区東で南北方向に走る戦国期の溝 3条を検出した。溝からは土師質の内耳鍋、常滑産の甕、平碗をはじめとする古瀬戸製品などが多数出土している。何れの溝も 10E 区に続いており、屋敷の区画溝であったと推測できる。また、溝と切り合う大型土坑からも同じような遺物が多数出土しており、溝と同時期に存在したことがわかる。なお、調査区西半分にも大小さまざまな土坑が散見されるが、現段階では建物跡のような遺構は確認できない。（伊奈和彦）



10Da 区 縄文時代の竪穴建物



10Da 区 竪穴建物内石囲炉

10Db区 調査区を北東から南西にかけて溝が4条走っている。特に南西部で南に曲がる溝は、10F、10G区にまたがる溝と対称を成す並び方をしていいる。他の地域と場を画する区画溝のひとつと考えられる。ただ、10Db区内には屋敷地など溝に伴う遺構は見当たらなかった。それらの溝より古い方形土坑からは弥生土器が多く出土した。張り床のように固くしまった床面を持っていたが、遺構内に柱穴が一つも見当たらず、土坑の用途ははっきりしない。調査区北側では井戸が出土した。径約100cmの円形のしっかりした掘り方に石積みのある井戸である。深さは約3.5mを測り、井戸の上面に積んであった片麻岩の川原石を落とし込み、耕作土とともに一気に埋められていた。遺物がなく時期がはっきりしないが、形式から近世以降の比較的新しいものと考えられる。その他柱穴は多数見られるが散在しており、さらに現代の建物や農耕による攪乱を受けていてまとまった遺構として認められるものは少ない。

10Db区でも450点を超える旧石器が出土した。出土域は扇状地状の地形が形成する舌状の礫層ラインの山側にあり、集中出土地区が4か所ほど認められる。出土層は中世遺構検出面直下からその約1m下層まで広範囲にわたった。土質としては黄褐色と黒色の混成砂質シルト層から明黄褐色の粘質シルト層に至る層位に旧石器分布層が横たわる。ただ、唯一調査区西端の下層確認グリッドにおいて黄橙色の粘質シルト層の上下幅30cmほどの範囲内で50点を超える集中出土を見た。石材は流紋岩質凝灰岩がほとんどであるが、黒曜石5点、チャートも2点認められた。器種は剥片が大多数を占めるものの、一部削器をはじめとする製品も認められた。流紋岩質凝灰岩を石材とするものの中には打撃痕がほとんどない母岩や大きめの石核もいくつか含まれる。また、出土点数の少ない黒曜石は3点が円形で、縁に細かい剥離痕がいくつもあり、削器であろうと考えられる。前述のグリッドでは、狭い範囲、薄い層の中に多くの流紋岩質凝灰岩のチップが含まれており、旧石器の加工場ではないかとの見方ができる。黒曜石の削器もここで出土しており、生活の場としても考えられるかもしれない。隣の調査区との間に現在の生活道路が横たわっており、この集中地区の中心が公道下にあることが予想される。(石原真吾)



10Db 区 中世の区画溝



10Db 区 弥生時代の方形土坑

10E 区

10E 区の調査成果としては、縄文時代の流路、中世～近世の遺構と遺物が確認された。縄文時代の流路は 10A 区の縄文土器を含む流路の続きと考えられるもので調査区の東側から調査区中央まで延びており、礫などに混じり縄文土器が出土した。中世の遺構としては、竪穴状遺構 2 基、掘立柱建物 9 棟、井戸 2 基、溝、土坑、柱穴が多数確認された。竪穴状遺構は 3×2 m のものと 5×5 m のものでいずれも床面近くに多くの礫があり、床面が叩き締めたように硬化していた。竪穴状遺構の脇には複数の掘立柱建物が確認されており、これらの建物と一体で機能していたものと考えられる。井戸は、径 1 m 程の小型のものと径 2.5 m 程の大型のものが検出された。前者は調査面からの深さが 0.9 m 程であったが湧水層に達しており水が常に湧く状態であった。後者は井戸の底まで約 4.5 m と深く掘削されており、井戸の埋土中から墨書山茶碗、小皿、常滑焼の甕、伊勢型鍋などが出土した。また掘削時の足場として利用したものか南東側へやや張り出して掘削されていた部分がありここにステップ状の小段がつくられていた。土坑は径 1 m 程の円形もしくは隅丸方形のものが多く確認されているが遺物などの出土がほとんどなくどのような性格のものか判然としない。こうした土坑の中で特異なものとして調査区西側で炭化物、焼土を含み、壁面が被熱し硬化した土坑が 2 基確認されている。近世の遺構としては明治 17 年の地籍図に記載されている里道である宮崎道が確認された。これは調査前からある現道下で検出され、道の脇に溝を伴っていた。縄文時代の遺物は土器以外に打製石斧が 1 点出土した。中世の遺物としては山茶碗、小皿、伊勢型鍋、常滑焼の甕、土師皿などが確認され

ており掘立柱建物の柱穴などからの山茶碗、伊勢型鍋などの出土が多く見られた。近世の遺物は磁器・陶器などが少量出土した。(成瀬友弘)



10E区 中世の遺物出土状況



10E区 中世の井戸断ち割り状況

10F区 10F区の調査成果としては、旧石器の剥片などの石器類、中世～近世の遺構と遺物が確認された。旧石器については出土する区域が2か所あり、調査区中央南よりで10G区の集中区域の北端にあたりと考えられるものと調査区東端で10Db区西側の集中区域の西端と考えられる。調査区東側の集中区では礫層が南北方向に堆積するのが確認されており、この西側に沿うように出土する地点が分布をしていた。中世の主な遺構としては、溝、掘立柱建物3棟、土坑などが確認されている。溝で最大のものは調査区東側で近世の溝に沿うように南北にのびた後、調査区中央を東西に走り西側の溝にきられている溝で区画溝と考えられるが東西方向で70mを超えており、非常に大きな区画を形成していたものと考えられる。また土坑では径1m程の円形もしくは隅丸方形のものが目立ち主に調査区中央部で数カ所のまとまりがみられる。土坑の中には扁平な片麻岩や常滑焼の甕片などを底に敷いた状態が確認されたものもある。この他に注目すべき遺構としては調査区中央に火葬施設と思われる土坑が検出され、焼骨・炭化物が埋土に含まれ底部に炭化材が井桁状に組まれていたことが確認された。遺物の出土がないため時期が現段階では明確ではないが周辺の遺構との関係から中世ではないかと考えている。近世の遺構の主なものとして調査区の東端・西端にそれぞれ南北に走る溝、広東碗が出土した土坑などが確認された。西側の溝は檜山地区、牧平地区の境界にほぼ沿っている

ことから村境としての機能を持っていたものであろう。東端の溝3条は現在も使用されている道に沿う形で走っており数回にわたり作り替えられたと考えられる。中世から近世にかけての遺物は少なく、山茶碗、小皿、常滑焼の甕、広東碗などが出土した。これら遺物とは別に縄文時代に属すると考えられる石鏃が1点出土した。(成瀬友弘)



10F区 中世の土坑群



10F区 調査区全景

10G区 調査区東西に南北に走る溝が多数検出された。また、明治の地積図中にも存在する額田地区の男川沿いの幹線道路（通称宮崎道）に伴う溝も南端で検出された。そして、それぞれの溝に囲まれた区域の中央部に張り床を持った竪穴状遺構が1基、南部には同時代に建て替えが行われたと思われる竪穴状遺構が3基検出された。また、竪穴状遺構に伴うと思われる素堀の井戸も検出された。井戸の南側に同形式の井戸が存在し、古瀬戸の卸皿、山茶碗片など中世の遺物が出土している。3基の竪穴状遺構も、山茶碗等中世の遺物が出土していることから、中世の遺構と判断してよさそうである。その内の2基の竪穴状遺構は、両者とも北東隅に片麻岩の扁平石が集石し、隅柱穴があり、南半分が浅く北側が深い。これらの西側に長軸方向を合わせた大型柱穴列が存在し、それぞれの場所で数棟の掘立柱建物が認められた。すなわち、類似する遺構群が2か所に展開していると考えられ、冒頭の溝で区画されたこの場所自体が一つの大きな屋敷地と考えることができそうである。さらに、南側の竪穴状遺構については、張り床のある内部の南側に細い柱穴列が認められ、南西隅には遺構の外とをつなぐスロープがあり、外部には南隅に接するように半円状の土坑とそれを取り巻く

ピット列が存在する。30年ほど前に発掘された上浜田遺跡(神奈川県)の例を参考にすると馬小屋の可能性も考えられる。この地の地名が「牧平」であることもこの検証の裏付けとして面白い。

10G区の旧石器出土数は1400点を超え、本遺跡の旧石器の中心分布域と言ってよい。器種は石核、ナイフ形石器、搔器、削器、槍先形尖頭器、二次加工や使用痕のある剥片を確認しており、その他は剥片石器およびチップと思われる。石材についてみると、点数の多い順から流紋岩質凝灰岩、黒曜石、チャートがあり、特に流紋岩質凝灰岩の割合が圧倒的に高いのが特徴である。それぞれの石材の産地は、昨年来の分析結果により、流紋岩質凝灰岩は鳳来寺周辺産、黒曜石は長野県和田峠を産地とすることが明らかになってきた。また、母岩や露頭の母岩についている物質がそのまま見つかることから、産地から持ち込んでいると考えられる。さらに、石核が少ないので、母岩を一次加工した後の石核を次の場所へ持ち去っているのではないかという予想も成り立つ。いずれにしても、旧石器時代の愛知県内の人の移動を知る上で貴重な資料となりそうである。乳白色の流紋岩質凝灰岩は鳳来寺、豊川周辺に他の色を呈する凝灰岩とともに存在する。点数の多さを考えればこの色を好んで持ち込んだのではないかと考えられる。ピンクや松脂岩を含むものは10G区に集中的に出土しているが、あまり好まず捨てたのではとの見方もある。旧石器は中世の遺構検出面から20～70cm下の明黄褐色のシルト層から多く出土した。旧石器出土層は昨年に比べるとかなり薄い範囲に集中している。出土域はこの調査区自体の特徴である旧河道が作った扇状地状の地形の縁のくぼみに分布する。河川が運んだ礫の堆積層の山側にいくつかの集中地区を形成しながら、大きなラインを作っている。また、10G区では旧石器時代の生活の跡である礫群が出土した。礫群は200点ほどで構成されており、乳白色のシルトブロックを多く含む明黄褐色シルト層と礫を含む層との境界のライン約20～30cmの幅で出土した。礫は拳大の大きさのものを主体とし、広い面積の面を下にして安定して存在し、赤く焼け、円形に分布していた。旧石器時代の礫群は愛知県においては駒場遺跡(豊川市)について2例目であり、旧石器出土量や礫群の出土状況とも考え合わせると、今後の県内の旧石器時代の様相を考察する上で重要な資料になりそうである。(石原真吾)



10G 区 調査区全景



10G 区 旧石器時代の礫群

10H 区 10H 区は愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した 09B 区と国道 473 号線を挟んだ南側に位置する。調査区内では江戸時代末期の水田に関わる溝が多数確認された。また井戸も 1 基確認されている。この井戸は素掘りの井戸で、検出面から約 1 m の深さに陶磁器類や円礫がレンズ状に堆積しており、約 1.5m の深さからは扁平な礫や板材が出土した。深さ約 2.8m の基底部では 2 つの釣瓶や長さ 30cm ほどの木材、先が細く削られた杭が出土している。 (榊原清人)

10I 区 調査成果としては、旧石器時代の剥片などの石器類、中世の遺構と遺物が確認された。旧石器は調査区の東側中央付近を中心に流紋岩質凝灰岩の剥片・チップなどが約 700 点出土しており、数か所の集中部が確認された。なお、石器では検出作業中に縄文時代草創期と思われる尖頭器も 1 点出土している。中世の主な遺構としては竪穴状遺構 2 棟、掘立柱建物 2 棟、井戸 1 基、屋敷地を区画すると思われる溝、その他土坑が多数確認されおり、これら遺構の中から出土するわずかな遺物から推定すると 15 世紀後半を中心とする遺構の分布が考えられる。中世の遺物は、山茶碗、古瀬戸の挿鉢片、常滑焼の甕、土師質の内耳鍋・茶釜、鞆の羽口などあるが遺物の出土点数としては非常に少ない。 (成瀬友弘)



10H区 近世の桶出土状況



10I区 調査区全景

まとめ 10B・10Db・10F・10G・10I区で、旧石器時代の石器・石核・剥片が集中して出土した。石器はナイフ形石器・搔器・削器が主であり、石材は設楽産の流紋岩質凝灰岩が多数を占める。特に10G区と10F区で、愛知県で2例目となる礫群を検出したことにより、この場所が後期旧石器時代の生活域であったことが判明した。10Da区では縄文時代中期と考えられる竪穴建物を2棟検出した。そのうちの1棟は石囲炉が良好な状態で残存していた。縄文土器は10A区の自然流路から中期の、10C区の自然流路から晩期のものがまとまって出土した。弥生時代の遺構は10A区で前期の土器を含む土坑1基と、10Db区で中期の土器を含む大型土坑1基を検出したにすぎないが、10C区の自然流路から同時期の土器が出土しており、付近に居住域があるものと推定される。中世の遺構は10A区を除くすべての調査区で検出した。特に区画溝に囲まれた屋敷地は、掘立柱建物・竪穴状遺構・井戸などの遺構が集中する地点と、遺構がほとんど見られない地点に分かれ、屋敷地の空間利用が想像できる好例となった。近世は10E区・10G区で道路2本と、10H区で完形の桶を含む井戸1基を検出したが、遺構・遺物とも希薄であった。(宇佐見守)